

平成30年度 学校評価表

品川区立立会小学校

校長 田邊 泰典

立会小学校校区教育協働委員会

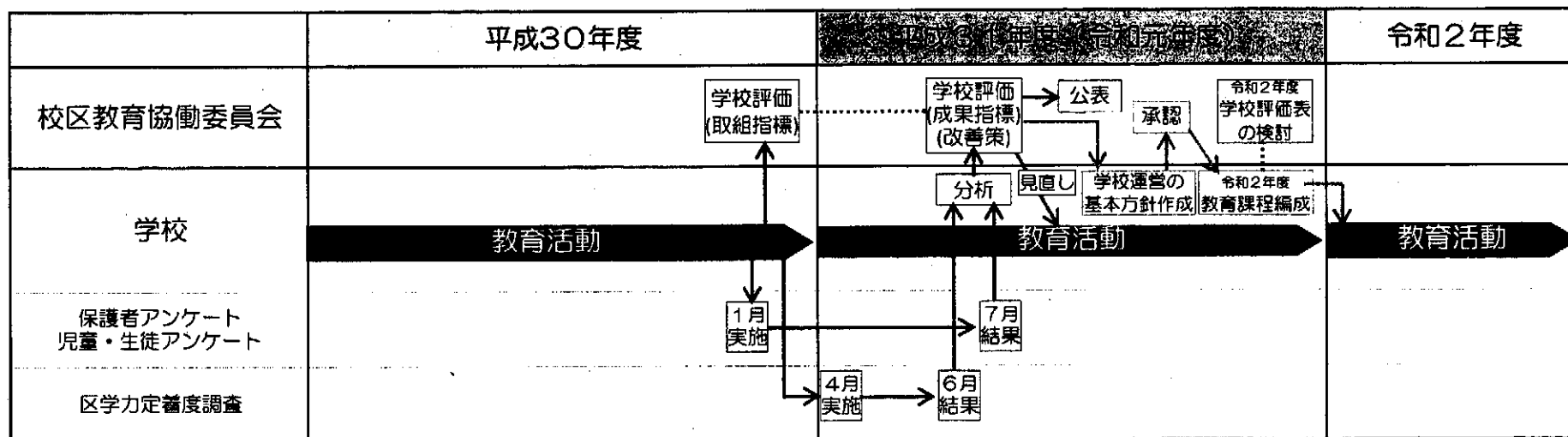
委員長 田近 洵一

校区教育協働委員会は、品川区校区教育協働委員会設置要綱（改正 平成30年3月30日教育長決定要綱第7号）に基づき、次に掲げる事項について、学校評価を行っています。

- (1) 学力に関すること。
- (2) 人間性や社会性に関すること。
- (3) 体力・健康に関すること。
- (4) いじめ防止の取組に関すること。
- (5) 特色ある教育活動に関すること。

学校評価を行う際、評価項目ごとに「成果指標」と「取組指標」を設定し、取組状況と取組によって表れた成果について把握しています。学校評価により浮き彫りになった学校の課題を委員会で共有し、改善策を考えました。学校評価の結果を公表するとともに、今年度の取組の見直しや来年度の教育課程の編成に生かしていきます。

学校評価の流れ（※平成30年度の学校評価が平成31年度（令和元年度）および令和2年度の教育活動につながる部分のみ表記しています。）



平成30年度 学校評価 品川区立立会小学校
 評価項目1 (学力に関すること)

重点目標		○基本的・基礎的な内容の確実な定着を図り、意欲的に学ぶ児童の育成を図る。未来を拓き未来に生きる子どもたちに身につけさせる力として「生きて働く知識・技能の習得」「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力」「学びを人生や社会に生かそうとする人間性」の三つの柱を意識して指導する。 ・学習スタンダードをさらに定着させ、全ての学級における学習規律の徹底を図る。 ・テスト等の評価を適切に行い、その後の指導に生かすことで基礎学力の定着を図る。 ・家庭と連携しながら、基礎基本の学力を確実に定着させる。			
評価指標	最上段: 成果指標	最上段: 成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策	
	2段目以降: 取組指標	2段目以降: 取組指標の達成状況の説明			
①	学習規律が徹底され、学習スタンダードの達成率が80%を超えている。	概ね達成できている。しかし、チャイムスタート、私語等、学年学級によって課題が残る部分もある。	B	○教員の理解不足により指導の徹底が図られていない部分があった。 →スタンダードは、教師・児童ともに学期ごとに確認し、実態に合わせて改善を検討する。	
	立会スタンダードの定着を図るために、学年・専科経営案にその方策を示し、学期末に達成調査をする。	学年でスタンダードの確認をしたが、学習に必要な物を所持している児童が見受けられたことから、指導に温度差があるとも言える。	B		
②	区・都・全国の学力テストにおける国語と算数の平均点を100とした場合、比較値で100を超えている。	区の学力テストにおける平均点を100とした場合、比較値で100を超える教科がほとんどである。	A	○100ます作文の指導が定着していることにより、書く力と思考力が上がっていることは高く評価できる。 →モジュールの時間を使った算数・国語の基礎学力向上の取組を継続する。	
	年間指導計画に、思考力・判断力を育てる授業を計画的に位置づける。100ます作文、100ます計算に重点的に取り組む。	100ます作文においては3年生以上がほぼ毎週取り組み、文章を組み立てる力も付けている。100ます計算は学年よっての取り組みとなっている。	A		
③	家庭学習の習慣化を調査し、定着率80%以上を目指す。	毎日、宿題に取り組ませた。80%以上が定着しているが、家庭の考え方や状況もあり、難しい部分も見られた。	A	○保護者に宿題内容を周知し継続して協力を仰いだ。家庭学習習慣が概ね身に付いている。 →宿題の内容や評価の方法など、教師自身が自己評価を常にしている。	
	宿題スタンダードに基づき、家庭学習(低30分・中40～50分・高60分)に取り組ませる。	ほぼ毎日、決まった宿題を出した。週末には発見カードや自主学習なども取り組ませた。	A		

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

評価項目2 (人間性や社会性に関すること)

重点目標		○子ども一人一人に豊かな社会性と人間性の育成を図るために、「いじめ」「不登校」はゼロを目指し、以下の取組を実施する。 ・各学年の系統性を意識した市民科授業を行う。(挨拶、呼名、マナー、無言集団行動の徹底指導等) ・毎週金曜日の生活指導夕会で児童の情報交換をし、全教職員で情報共有のもと指導にあたる。 ・縦割り班を1～6年で組織し、異学年での活動を常時活動(縦割り清掃等)に取り入れ、心の繋がりを広め、豊かな人間関係を育てる。 ・特別支援コーディネーターとスクールカウンセラー、特別支援専門員、巡回指導員と情報を共有しながら、支援を要する児童の指導にあたる。 ・全教職員が当事者意識をもち、模範的な姿を見せる。		
評価指標	最上段:成果指標	最上段:成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降:取組指標	2段目以降:取組指標の達成状況の説明		
①	生活アンケートでの学校生活や友達関係など肯定的に回答している児童が80%以上いる。	生活アンケートでは否定的な回答がほぼ見当たらないが、自分の問題を解決できずにいる児童もいる。	A	○よい関係が築けているが、縦割り班活動の組織は学期ごとが変わるため人間関係が構築しにくい。縦割り班活動が清掃と全校遠足に限られている。 一年間組織で活動する。清掃、長縄跳び・縦割り給食・縦割り班会議など交流内容を工夫しつながりを重視する。
	縦割り班活動や特色ある教育活動など、体験的な活動を通して指導する。	縦割り班活動では、下級生を手伝ったり、やさしく声掛けをしたりする様子からも概ね達成している。	A	
②	学校公開時等の保護者アンケートで挨拶について肯定的な結果が90%以上ある。	保護者アンケートを見ても肯定的な意見が多く、概ね達成していると言える。	B	○立ち止まって挨拶をする児童が増えた。職員室入室の仕方など、教員の指導により習慣化してきた。学校来校者への挨拶が定着しない。 →学校内にいる方は、全て学校関係者と理解させ、場に応じた行動ができるように指導する。
	教師は、挨拶や礼儀、場に応じた行動など、しつけるべきことを具体的に指導する。	朝の会、帰りの会、市民科の授業などで毎日のように指導をしている。また、感謝の気持ち等言葉で伝えることも事ある毎に指導している。	B	
③	児童は静かに集合や整列ができ、日常の学校生活において規律ある行動が確実にできるようにする。	静かに集合・整列するなど規律ある行動が100%とは言えず、気が緩んでしまう様子や空気感を読めずにいる児童もいる。また、高学年の中には注意する教師によって対応や行動を変える児童がいる。	B	○全校朝会時の集合・整列は静かにできた。教室移動の際の廊下歩行は、どの教師も同じ意識をもち統一した指導をする必要がある。 →学校全体、学年でルールを定期的を確認していく。学級経営が基礎となるが、指導が入りにくい児童については、児童理解を深め、全教職員が情報を共有して指導する。
	「生活スタンダードに基づき、統一した指導を行うことで定着する」という共通の意識をもち、指導を行う。	学年間で統一を図り指導しているが、上履きの記名の徹底などを見ても、教師が統一した指導をしているとは言い難い。	B	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

評価項目3 (体力・健康に関すること)

重点目標		○すすんで運動に取り組む意識と意欲を育む。自分の健康について正しく理解させ、生涯にわたってすすんで健康づくりに取り組めるようにする。 ・新体力テストの結果から学年の実態を把握し、一学級一取組などの実践を通して指導を行う。 ・品川スポーツトライアルやワンミニッツエクササイズの実践を通して、運動の日常化を図る。 ・自らの体に関心を持ち、健康の保持増進につながる指導を行う。		
評価指標	最上段: 成果指標	最上段: 成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降: 取組指標	2段目以降: 取組指標の達成状況の説明		
①	体力調査の結果が昨年度までの記録や都平均と比較して上回るようにする。	体力テストでは、94項目中8、9割方平均を超えている。	A	○テクニカルアドバイザーの活用が、個に応じた指導や動きの提示などで有効であった。 →児童の実態を個別に把握し、必要な指導や支援ができるように、引き続きテクニカルアドバイザーを活用する。 ○行事等により、週1回行うことが徹底できなかった。 →行事との兼ね合いを見ながら、時間を調整して、スポーツトライアルに取り組ませていく。
	テクニカルアドバイザーを活用し、体育のねらいを明確に設定し、児童自身が課題をもって意欲的に運動に取り組むようにさせる。	テクニカルアドバイザーと連携し、個に応じた指導ができ、児童の意欲も高まった。また、より専門的な内容を指導することができた。	A	
	各学級が週1回20分休みに体力向上タイムを設け、スポーツトライアルの種目に取り組む。	スポーツトライアルは各学年で取り組む努力はしたが、行事などとの兼ね合いもあり、継続的に実施できなかった。	B	
②	全クラスで定期的にワンミニッツエクササイズを導入する。	体育部から出されるプリントをもとに、体育時の準備運動や朝の会などで取り組んだ学級もあるが全クラスで行っているとは言えない。	B	○今週のワンミニッツエクササイズとして紹介し、全学級で定期的に行うよう声かけをしたが、取り組みについては差があった。 →毎朝、定時に一斉に取り組むように音楽を流す。週案でも実施を記録していく。運動会等で保護者に啓発する。
	校内体育部会が中心となり、ワンミニッツエクササイズの実技研修会を行い、体育の時間の導入等で取り組む。	年度当初に実技研修会を行ったが、その後は体育部からのプリント配布により実施を促しているが、実施状況については未確認である。	B	
③	虫歯のない児童率80%虫歯治療率100%を目指す。健康保持増進に取り組む。	虫歯治療率は100%であった。	A	○6年生で良い歯の表彰を受ける児童が60%いた。虫歯治療率は100%だった。低学年で歯みがき教室を実施した。 →家庭での取り組みが欠かせない。家庭で取り組みも促す方法を工夫する。
	全校で「歯みがきチャレンジ週間」に取り組む。歯磨きをする習慣を育成する。	年2回歯みがきチャレンジ週間には取り組んだが、習慣付けができたかは分からない。	B	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

評価項目4 (いじめの防止の取組に関すること)

重点目標		○教員はいじめ問題への鋭敏な感覚を養い、未然防止、早期発見、早期対応に努める。 ・いじめに対しては、学校全体で情報を共有し、組織的な対応を図る。 ・学校いじめ防止対策委員会を組織し、各教職員の役割と責任を明確にし、学校一丸となって解消に取り組む。		
評価指標	最上段:成果指標	最上段:成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降:取組指標	2段目以降:取組指標の達成状況の説明		
①	いじめ対策委員会において迅速に対応し、いじめ発見から、1カ月以内の解決を目指す。	いじめに関するアンケートで早期発見ができ、いじめに至る前に問題解決に至った。	A	○いじめアンケートや月1回のいじめ報告シートからいじめを早期発見し、早期解決をすることができた。 →月1回いじめ報告シートを作成し、日常的に児童の変容に気付くようにする。
	定期的にアンケートを実施するとともに、日常的に児童観察及び情報交換をし、早期発見に努める。学校いじめ対策委員会で組織的な対応をする。	学年間、学校全体で情報共有し、連携した組織的な対応が行えた。	A	
	養護教諭、担任、管理職、スクールカウンセラー、巡回相談員がチームを組み、情報を共有するとともに、保護者や関係諸機関と連携を図る。	その都度、適切な対応、連携がとれた。ただし、「養護教諭にお任せすれば…」という意識も感じる。負担感がないよう、教職員全員が常に危機感をもって臨みたい。	A	
②	児童は、「いじめは重大な人権侵害である」と認識して、言葉遣いや態度に気を付けている。	市民科の授業や日々の指導の中で、言葉遣いや温かな気持ちで人に接することなど指導しているが、100%とは言えない。あまり人権感覚を意識できていない児童がいることも確かである。	B	○いじめはいけないことと分かっているが、行った事象が重大な人権侵害という意識が希薄で行動に結びついていない。 →いじめの問題に関わる人権教育を市民科の年間指導計画に明確に位置づけ、発達段階の応じて適切に指導を重ねる。土曜日授業の朝の会など定期的にいじめについて話し合う時間を設定していく。
	児童は土曜授業においていじめバッジを付け、定期的に全校朝会や朝の会・帰りの会でいじめ防止の話をする。	いじめノーバッジは土曜日授業の日はつけた。しかし、いじめ防止推進という本来の目的を意識しているようには、あまり思えない。	B	
③	児童は、インターネットやスマートフォンとの上手な付き合い方を考えている。	市民科の授業を通して指導をしているが、実際には家庭で使用する事が多く、結果は見えず判断しにくい。	B	○SNSルール作りを家庭に呼びかけているが、実際にどの程度のルールを決めているか定かではない。 →SNSルール作りの用紙を配布して家庭に協力してもらおう。SNSに関する教員の研修会を開き、知識と理解を高める。
	SNSによるいじめ防止の授業を実施する。保護者会やお知らせ等でSNSの家庭でのルール作成の啓発をする。	児童には市民科の授業でSNSの怖さを指導したり、保護者に向けて、保護者会で啓発を行ったりした。	B	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

評価項目5 (特別支援教育)

重点目標		・特別支援教育校内委員会(メンバー:校長、副校長、教務主幹、生活指導主幹、養護教諭、特別支援教育コーディネーター、スクールカウンセラー、当該児童学級担任)を月に1回開催し、組織的な特別支援教育の推進、特別教育校内委員会の企画、運営を進める。 ・スクールカウンセラーが定期的にすべての学級の様子を参観し、児童の実態と支援のあり方などについて検討し、教職員の児童理解を推進する。 ・年に2回特別支援教育全体会を開き、特別支援教育を受けている児童の情報と学級の様子を共有する。		
評価指標	最上段:成果指標	最上段:成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降:取組指標	2段目以降:取組指標の達成状況の説明		
①	保護者の理解を得て、支援が必要な児童が特別支援教室や支援員などの適切な支援を受けられるようにする。	個人面談時に、個に応じた指導ができるよう学習支援員の配置について理解を得た。また、特別支援教室への橋渡しもできた。さらに指導環境を見直すこともできた。	A	○保護者の特別支援教育への理解と関心が進み、ほとんどの児童を適切な支援につなげることができるようになってきた。 ○カウンセラーと学校の連携が円滑に行われ、適切な支援に向かっている。 →個別の事例を通して、全教員の特別支援教育への理解を広げるようにする。
	個別の支援計画や観察記録等をファイリングして、一人一人のニーズに応じた教育課程を編成する。	個別の支援計画に沿って編成し、実施できている。	A	
	カウンセラーや巡回相談員と情報共有し、月に1回特別支援教育校内委員会を開く。	特別支援教育校内委員会を定期的に関き、情報の共有が図れた。	A	
②	児童は、見通しをもって時刻や約束を守って行動できている。	時間の声掛けや見通しをもって行動している児童を称賛するなど、守れる児童が増えているが、できていない児童もいる。また、教師の前ではできたり、一過性であったりする様子も見られ、集団として自主的な行動とは言えない。	B	○合理的配慮について、教員の知識理解を深める必要がある。学級の中での居場所を確保し、個別に活躍できる場の設定を工夫する。 →個別に支援の必要な児童へ、どのような合理的配慮が考えられるか、教員の研修をとおして理解を深める。 →一人一人の活躍の場を意図的に設定したり、児童の思いを丁寧に聞いたりしながら、個性を認め合う学級づくりをする。
	黒板に予定を表示したり、手順を一つずつ説明するなど、合理的配慮に基づいた指示をする。日々の行動の常態化を図る。	今週や今日の予定を表示したり、活動の順序を整理して板書したりと視覚的に理解できるよう、合理的配慮に基づいた指導をしている。また、曜日や教科による行動のルーティン化により、行動の常態化を図っている。	A	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

評価項目6 (学校独自の特色ある教育活動)

重点目標		・体験学習やボランティアを活用した専門的な活動を積極的に取り入れ、本物にふれた授業を計画・実施していく。 ・音楽活動や造形活動にも力を入れ、児童の情操教育を育む。 ・平成21年度より実施している「立会スタンダード」の徹底を図り、全教職員が統一された指導を行っていく。		
評価指標	最上段: 成果指標	最上段: 成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降: 取組指標	2段目以降: 取組指標の達成状況の説明		
①	保護者アンケートの特色ある教育活動について肯定的な答えを80%以上にする。	どの行事においても、否定的な意見は少数であることから、達成していると言える。	A	○音楽会や学芸会などの行事で保護者の肯定的な意見がほとんどだった。 →保護者の期待する行事の質を維持しつつ、各教科指導との関連を図って年間指導計画を作成する。
	「雪国体験」「農業体験」「IEJプログラム」等、様々な体験学習を重視した質の高い授業を展開する。	児童の振り返りや感想から、満足感や成就感が感じられ、見方・考え方を広げたとと言える。	A	
②	学校行事後の児童の感想において肯定的な感想を80%以上にする。	児童の振り返りや感想から、意欲的に取り組んだことが感じられ、豊かな心情が育っている。	A	○各行事を通して、児童の達成感や成就感を育成することができた。 →豊かな情操を育むために、日常の授業を質の高いものにしていく。
	音楽活動や造形活動、学芸会・展覧会など、児童の情操を育む活動を実践する。	児童が気持ちよく歌う表情や真剣に作品作りに取り組む様子などから、心の中を表現する喜びが感じられ、児童の情操を育む活動が実践できている。また児童が達成感を味わい、音楽会、展覧会を心待ちにしている様子からもそれが窺える。	A	
③	児童アンケートにおいて肯定的な答えを80%以上にする。	児童アンケートで否定的な意見を主張する児童はかなり少ない。	A	○児童・保護者の感想から特色ある教育活動への関心が高いことがわかった。 →教科指導と行事・生活の総合から学力・豊かな心情・体力をバランスよく育む。
	子ども達は学校行事や社会体験活動・自然体験活動を楽しみにしている。	「運動会」「音楽会」など大きな行事だけでなく、清掃活動なども意欲的に行う様子から、体験活動を楽しみにしていることが分かる。	A	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成